

クライストとナシヨナリズム

尾 関 英 正

一 ナポレオン憎悪とクライスト

クライスト (Heinrich von Kleist, 1777-1811) が民族あるいは国家へと目を向け始め、政治的色彩の強い文章を書き出したのは、一八〇五年頃からである。もちろん、作品として書かれたものは、一八〇八年の『ヘルマンの戦い』(, Die Hermannschlacht) が最初だが、それまでも手紙の中に祖国や世界の動きを意識する言葉や表現がすでにいくつか見出されることから、時代の動きが少なからず彼の関心の対象になっていたことは確かである。だとすると、以後六年間の活動は、詩人のわずか十年余りの創作期間の半分以上を占めることにもなり、この頃のクライストの心の動きを知らないで、詩人の愛国的側面を正しく理解することはできないと言えよう。

時代に対する彼の関心は、何と言ってもナポレオンに集約されていたようである。一八〇五年の手紙で、クライストはナポレオンを指して「幸運の冠を戴いた冒険家⁽¹⁾」とか「この世界の悪魔⁽²⁾」といった呼び方をしていることから、ナポレオンが関心の対象であったことは間違いないが、彼は、まだすんで自ら行動を起こそうとする思いには至っていないかった。しかし一八〇六年、イエーナ戦役の直後に書かれたケーニヒスベルクからの手紙を見る時、ナポレオ

ンへの見方が、全く敵意へと変化していることに気づく。ナポレオンの支配を受けるとはなんという破滅ぶりであるか、又そのことにさえ気づいてもいない人間が大部分である、とクライストは憤然と語っている。「もしこの暴君が自分の国でも建てたとしたら、恐ろしいことだ……私達はローマ人の王政下の民だ。奴はフランスを富ませようとしてヨーロッパの掠奪を目指している。しかし天がそれをどのように導くかは分らない。」⁽³⁾

丁度この時は、ナポレオンが皇帝に即位した一年後で、その勢力たるや向うところ敵なしの状況であった。一八〇五年のアウステルリッツの戦いでは、オーストリア・ロシア軍が敗北、続く一八〇六年のイエーナ・アウエルシュエッツ及びハレの戦いでは、プロシヤ軍が惨敗するなど、ナポレオンがヨーロッパ全土をほしいまま戦乱の渦に巻き込んでいった時代であった。皮肉にも一八〇七年の一月に、スパイの容疑でクライストはフランス軍に逮捕され、ブザンソン近くのジュー要塞に監禁されて、釈放される七月まで捕虜となってしまう。こうしたことも加わって（この時すでに頽廃した大都会パリへの嫌悪を持っていた）クライストのフランス的なものに対する嫌悪感が、すべてナポレオンに集中し、激しい敵意へと変わっていったようである。

この辺りからはっきりと『ヘルマンの戦い』の兆しが見えてくる。ローマ人の許すべからざる精神とその支配に対して、再び立ち向わねばならないとして、クライストは行動の対象を見つけ出したと言っている。全く見通しのない状況の中で、あのトイトブルクの戦い⁽⁴⁾の時に自分が祖国ドイツを救わなければならないと自覚する。「この世界の悪魔」のような存在とそれに服従する民族とさらには又反道徳的な暴力支配から、民族、国家を解放しなければならぬという壮大な使命を抱く時、クライストはどれほどの喜びに打ち震えたことだろう。そして一八〇七年、「引きこもりがちな生き方をしている私を、世界から孤立しているとあなたはいつも見ておられました。しかし私は

ど世界と密接に関わっている人間は、恐らく誰もいないでしょう⁽⁵⁾」とクライストは、友人のマリーに宛てた手紙で語り、祖国のため健筆をふるっていくことになる。

こうして一八〇五年頃から、クライストは愛国的情熱に掻き立てられ、政治的方向へとめり込んでいくことになるが、同時にそれは又彼を詩人として成長させていくきっかけとなったことも忘れてはならない。憂国の情を示しながら激しく世界に立ち向っていく戦いは、一方ではクライストの創作世界における自己との厳しい戦いであったように見えてくる。愛国心と詩作への情熱が重なり合って、後のクライストの世界が形づくられていったと言っても過言ではないだろう。そしてその関わりにこそ、詩人としての真の姿と同時に真のナシヨナリストとしての意味が見出されるように思われる。

二 クライストのアンガー・ジュマン

一八〇五年頃からクライストが「世界と密接に関わって」いく様子を概観してきたが、この世界という言葉は、彼にとって単にナポレオンの支配する忌むしい戦乱の世界を意味するだけではないようである。クライスト自ら、「引きこもりがちな生き方をしている私を、世界から孤立しているとあなたはいつも見ておられました……」とマリーに但し書きをする時、詩人の胸中には、外面的にはなく内面的意味においてすでに以前から深く世界に関わっているという気持があり、そこにこそ自分の詩作する意味とさらには苦悩があったことを暗示している。『シュロッフエンシュタイン家』(„Die Familie Schroffenstein“)『じわれが&』(„Der zerbrochne Krug“)そして『アンフィートリ

「オノン」(Amphitryon⁷)を見た場合にも、自我と世界との関わりにクライストの詩作のグルントテーマがあったようにある。

詩作を志す前のクライストは、啓蒙主義の影響下にあつて諸々の道徳的真理を認識し、それに基づいて自分の考え方や行動を規定しようと學問に骨身を削っていた。しかしこの一見安全に見える考え方をしていたクライストも、やがて合理精神のもとに成り立っているはずの大都會の頹廢ぶりを目の当りにするや、合理精神への信奉も揺らぎ始めてくる。そうかといって、又自然の流れを信頼するにしても、そこには偶然や不安やさらには醜惡な側面もあることを知って、彼は現實を「不完全な世界 (sebrechliche Welt)⁽⁹⁾」と見なざるを得ず、拠所を失つて、戸惑い、躊躇するばかりの状態に陥ってしまった。そして自我と「不完全な世界」との折り合わない状況の中で、クライストはその解決を求めて詩作に手を染めていくことになったのである。

この意味で、クライストは世界との関わりを常に詩作の中で意識していたからこそ、外面的には逆に「引きこもりがちな生き方」にも見えたのだと言えよう。一八〇六年、クライストは「私が他の仕事に使えるならば、心から喜んでそれに飛びつくでしょうが、私は詩作を止めることができないから、ただ詩作しているにすぎないのです⁽⁷⁾」と友人のリューレに宛てて述べているが、これはまさに内面的であるにしろ、世界との関わりの問題をクライスト自身強く意識していたからであらう。そして又ここにこそクライストの考える民族、国家の在り方と彼の世界への関わりが生まれてくる源があったと言つていいのではないだろうか。

そして今、戦乱の穏やかならざる時期が到来し、クライストは現實の「不完全な世界」に対する祖国の在り方を訴えようとする。ナポレオンへの激しい憎惡と國民を鼓舞する態度は、まさにその現われと言える。イエーナ戦役の前

に着手された『ペンテズイレーン』(„Penthesilea“) ⁽⁸⁾と描き出されたあの「魂のすべての苦悩と光輝」が、『ヘルマンの戦い』という形をとって、改めてドイツ人に向けて説かれるのである。「私はこの一篇をドイツ人に贈る。どんな条件でも気にしません。ただそれが世に贈られるようにしてほしだけです。」⁽⁹⁾

この一篇をもってドイツ国民を鼓舞しようとする気持がいかに強いかは一目瞭然であるが、しかしそこにはどれほどの効果が期待されたかは甚だ疑わしい。かつてクライストは、「不完全な世界」と自我との折り合わない中でその解決を詩作に求めたはずであった。その文学上の方法を、今彼は改めてドイツ国民に唱え、士気を鼓舞しようとするのである。いみじくもH・E・ノサックは、「社会的変革を喚起するまでにはいかにしろ、それを広汎な大衆の意識にのぼらせ、それによって変革を促した文学作品は、ほとんどないと言っている⁽¹⁰⁾」と言う。つまりクライストの現実への強い期待とは別に、この作品自体は政治的色彩の強い文学作品であっても、いわゆる実用主義的作品ではないということである。ドイツ国民を鼓舞しようとする使命を抱きながらも、その世界への関わり方は、クライストの場合あまりにも文学的であったと言えるのではないだろうか。

こうした行為に出ざるをえなかったのは、クライストの世界観、文学観に原因があるように見える。それをフリックは「一回性と具体性の中に永遠なる要請を置く自覚存在的狀況に……徹底的に目を向けることが行われている⁽¹¹⁾」からだと言ふ。つまり、今ここで、「一回性と具体性の中で」何がなされるべきか(「永遠なる要請」)が問われると、一つの行為を通して世界への自我の透入が行われ、その相互滲透状態の中に初めて永遠なる自我が自覚される、というのである。こうした考え方は、確かにクライストの日常の行動の中にもはっきりと現われている。例えば、一七九二年ゲーテがカール・アウグスト公に従ってフランスに従軍したのに対して、クライストは一八〇九年歴史学者のダ

ヘルマンと一緒にオーストリアへ戦場視察に出かけている。この行動は表面的には極めて類似しているが、意識の点では大きく異っていたことに注意しなければならない。周知の通り、ゲーテがフランスに赴いたのは、自ら自由な状態にありながら、又自分自身を守るだけの距離を置いて、現実の動きを観察しようとしたためであった。つまり、彼は大きく揺れ動いていく世界史の中心点で、歴史の生成過程としての戦いをじっくり客観的に観察しようとしたのである。一方、オーストリアに向いたクライストにとっては、戦いは「不完全な世界」そのものであり、自分は今、ここで何をなすべきかと距離を全く置かない形で自問し、自らナショナリストとしての行動をとることになる。

一回性と具体性の中に永遠なる要請を置くクライストの胸中には、ナポレオンが勢いを得れば得るほど、もはや詩作のただけで永遠なる要請に答えて、安穩としていられない思いが、募ってきたのである。そしてその思いが彼を刺激し、ドイツ人に祖国の永遠なる自我を自覚させるべく、彼はその使命を自らに与えることとなった。その結果初めて、ドイツ人の士気を鼓舞しようとする気持と、戦争肯定の激しい感情が表面化し、『ヘルマンの戦い』が生まれ出ることになったと言えよう。

三 『ヘルマンの戦い』の構図

国民の士気を鼓舞する目的で書かれた『ヘルマンの戦い』が、同名のクロップシュトックの作品に倣ったものであることは、よく知られている。この作品についてクライストは、自ら「効果の点ではより確実⁽¹²⁾」と語っているが、既に見てきたように、この一篇がドイツ国民の意識にどれほど滲透しえたかは、疑問と言わざるをえない。ヘルマンに

まつわる歴史的伝承も、クロップシュトックの『ヘルマンの戦い』も、トイトブルクの森でローマ軍を撃退し、ゲルマニアに勝利と独立をもたらす内容であり、国民を鼓舞するには格好の素材であったことは確かである。しかし一旦そこにクライストの世界観が加わる時、この話は単にローマ人に対する敵意を促し、祖国に勝利を導かんとする内容のものでなくなってくると言っている。

表面的にはなるほど全体を通じて、特にヘルマンの中で、ローマ人に対する激しい憎悪と戦いへの徹底ぶりが表わされているが、そこにはクライストの場合、国民の自我に関わる問題が描き出されているのである。特にクライストが好んだと言われる第五幕の戦闘開始直前に聞かれる弾唱詩人の歌が、その全てを表わしているように思われる。

あの異邦人の侵入した、

その日から、私達は人間として苦しんだ。

嘲笑しつつ私達に加えた、

あの最後の災厄に報いもせず、神々の教えに従って、

幾年も許しの徳を積んできた。

しかし遂に桎梏の重みに加わり、

脱すべき時は来た。(V. 1718-1725)

この中のとりわけ「人間として苦しんだ」という言葉は、まさに「不完全な世界」の中で損われた国民の自我を暗示していることは間違いない。そして「神々の教えに従って」と歌われる時、その自我は神の意志によってドイツ人

に与えられた犯すべからざる神聖なものであったことも自ずと知れよう。クライスト同様、ヘルマンをしてローマ人をひどく憎ませたのも、つまるところローマの將軍ヴァールスが被造物の神聖なる摂理を破壊しながら、ドイツ人を世界支配と權力欲の道具にしようとし、自らを神に仕立てたからである。これは同時に、神によって与えられたドイツ人の自我を彼らから奪うことにも繋がってくる。その時、国民は「桎梏の重み」に耐えかね、永遠なる要請に従って敢然と戦いに挑んでいくことになる。

この意味から、ヘルマンの激しい憎悪に満ちた戦いは、永遠なる自我を希求する戦いであつたと言える。従つて、戦いへの徹底した激しさは、そのまま永遠なる自我希求の強さを意味することになる。そして表面的には、それは極めて冷酷無情な様相を示し出していく。ここが又いかに、ナシヨナリストとしてのクライストが誤解を招くところでもあつたのだろう。

私に善事をほどこそうともローマ人に何の用があろう……

私は嘲笑的な悪魔の血を決して愛そうとは思わない！

それがゲルマニアにはびこる限り、

憎悪は私の責務であり、復讐は私の徳なのだ！（V. 1718-1725）

この一見非情とも見える憎悪は、ドイツ人の永遠なる自我を求めるヘルマンの徹底さの現われであり、これをヘルマンの冷酷無情からくるものと見なすのは、妥当とは言えない。H・マイヤーは「この主人公は人道的感情に触れることもなく、自分がよいと思う目的のためには手段を選ぶことを考えていない……彼にとっては何もう敵は人間でな

(13)と述べている。ヘルマンが「手段を選ぶことを考えていない」か、あるいは又「彼にとつてはもう敵は人間でない」かは別にしても、ヘルマンがその人間性を垣間見せる時のあることも見逃してはならないだろう。ローマ人によってドイツ人の子供が火中から救出されたという報告がなされた時のヘルマンが、そうである。

そんなことをしてくれたとは、いまわしい奴だ！

そんな話を聞くと、いつ時なりとも、

私の心が鈍る、ドイツに加えられた陰謀に

正義の大業をなさうとする心が鈍る！ (V, 1718-1721)

この「心が鈍る」という言葉は、この作品だけでなく他のいずれの作品にも見られる特徴で、主人公の人間の側面を示すと同時に、敵をも人間と見なしている証しだと言えるのではないだろうか。しかしこうした戸惑いや反省へと深く入り込むことは、損われた自我を永遠化する「正義の大業」を放棄することにも繋がってくる。その典型が『こわれがめ』のエーフェであり、彼女の姿はクライストをして遠大なる思想の「影」にしかすぎないといわしめるほどであった。つまり相対的意味での善悪は、永遠とは相容れないもののだと言えよう。そのためにこうした考えの下では、永遠なる自我希求のために一切の他の出来事や問題は、その意味を失ってこざるをえない。

この考え方は、戦争に対するヘルマンの見方そのものにも関わってくる。非凡としか言いようのないほど権謀術にたけた主人公は、味方すら欺くことも厭わない。さらには又敵を迎え撃つにあたって、祖国の財産を一切処分するよう、といった極端な発言すらしていく。明らかにここでは、戦いは祖国を敵の侵入から守るといった一般的、相対

の意味で捉えられてはいない。つまりヘルマンにとって、戦いは国民の損われた自我を「不完全な世界」の中で永遠化するための行為の一つであったと言えよう。この発想から従って、戦い自体いわゆる本来の目的を失って、自我永遠化の手段としての死滅行為の代わりとなり、死のイメージが色濃く漂ってくる。同時に又そこには喜びと至福の感情が伴い出るのである。

私は一步一步偉大なる祖先の国を失いたいのだ。

すべての森のすべての溪流にあらかじめ、

黄金の橋を掛けたいのだ……

国境の石の上で、最後の友と一緒に、

勇者として美しく死にたいのだ。(V. 350-360)

この死のイメージは、クライストの作品を見渡した場合、様々な形をとりながらも必ず出てくるモティーフである。そしてそこで同時に主人公が感じとる至福感も、自我と「不完全な世界」との相互滲透の喜びと言っていいだろう。つまり損われた自我が神聖なる自我として永遠化されると同時に、そのために今まで行われてきた、いわゆる相対的意味での悪や罪は、その死の瞬間に償われることになるからである。その意味で、まさに死は自我と世界の相互滲透を表わすと言っている。ヴィーゼが「自由意志による死において、人間は個体化の限界を打ち破る。こうした死は自我を無名の根源に一致させる、生のこの上ない陶醉した昇華とみなせる¹⁴⁾」と述べるのも、まさしくこの意味においてであろう。だからこそ、ヘルマンは「一步一步偉大なる祖先の国を失いたい」のであり、又「すべての森のすべての

溪流にあらかじめ、黄金の橋を掛けたい」のである。

このような、ヘルマンが希求した国民の永遠なる自我こそ、クライストがドイツ国民に訴えたかった点であった。しかしここで一つ問題が残ることに注意しなければならない。すでに見てきた通り、その国民の永遠なる自我の追求は、必然的に悲劇的色彩を帯びざるをえないことである。ここが、もともとドイツ国民の士気を鼓舞せんとしたクライストには、大きな問題であったと言えよう。つまり、クライストにしてみれば、『ヘルマンの戦い』はせめて形の上だけでもドイツに勝利をもたらす内容の作品にしたかったはずである、そこでその矛盾をなくすべく、彼は永遠なる自我追求の思想をヘルマンの言葉の中だけで暗示しながら、作品の結末はドイツの勝利で終わらせる方法をとることになったと言えよう。

一応こうして双方の目論見をクライストは、形の上ではうまく処理することができたわけである。しかし、元来文学に求められた永遠が、そのまま現実の世界に期待できるはずのものではない。これはすでに見てきた通りクライストの現実への強い期待と思入れが、さらには彼の世界観がそうさせたことは明らかである。いづれにしても、この点においてこそ『ヘルマンの戦い』がどれほど国民の意識に滲透しえたか、という疑問が生じてくるのであり、さらには又愛国心に燃えるクライストが悲劇的な道を歩まねばならない原因があったと言えるのではないだろうか。

四 愛国詩人としての悲劇

効果の点は別にしてもこの『ヘルマンの戦い』をもって永遠なる自我の追求を訴えんとしたクライストは、翌一八

○九年にも雑誌『ゲルマニア』(„Germania“)の刊行を企て、さらに具体的に自分の思想を国民に説こうとする。しかしこの計画は、ヴァグラムの戦いでナポレオン軍が勝利をおさめ、ウィーン講和条約が成立するという情勢の変化により、失敗してしまうことになる。この辺りから、現実世界へのクライストの関わり方の矛盾が、あらわになってきたようである。「不完全な世界」と自我との相剋は、すでに見てきたように詩作の中でこそ解決可能であっても、それを現実の世界に求めること自体不可能であった。にもかかわらず、クライストは改めてそれを論文の形で訴えかけていく。方法論が問題なのではなく、アンガージュマン自体が問題であることに、クライストは全く気づいていない。従って、彼の現実への期待と思い入れが強くなればなるほど、その遠大なる思想は益々彼を世界から引き離し、孤独に陥らせることになってしまう。

クライストは、『ゲルマニア』に掲載すべく準備した「この戦争で何が問題か」という論文の中で、祖国ドイツの在り方とドイツ人の使命について次のように語っている。「支配欲や征服の精神を知らず、他の社会と同様、存在するにふさわしい、又許すにふさわしい社会、そして、自らの名譽は決して考えず、他のすべての国の名譽と平安を考えずにはいないだろう社会……こうした社会の存在は、ドイツ人の心のある限り存在する。そして又その社会は、太陽が光を失うほどの流血によってしか葬られることはない。」⁽¹⁵⁾つまり、クライストが説く国家の在り方は、まさに神の意志によって与えられた神聖で永遠なる自我をもつ国家だと言えよう。そしてドイツ人がその使命を持っているとクライストは確信している。しかしこうした国家は、現実の世界にある限り全く考えられない。クライスト自身、損われた自我と「不完全な世界」との折り合わない中で、理想としての永遠なる自我を求めて詩作に手を染めていたはずではなかっただろうか。

こうしたアンガージュマンがいかに無理なものであるかが、やがてクライストにもいやおうなく明らかにされてくる。これは、「ドイツ人の問答教科書」中のドイツの現状に関する彼自身の見方からも、十分窺いしれよう。「(問) ドイツ人は現状によれば、すでにあらゆる徳とあらゆる平安とあらゆる榮譽の頂点に立ったと考えるか。(答) 決してそうは考えません。(問) では、少くともその頂点に達するよい道を辿つたのだろうか。(答) いいえ、それも違います。」⁽¹⁶⁾クライストの現実への期待と骨折りにもかかわらず、ドイツの現状が彼の理想といかにかけ離れているかが、はっきりと示されている。

現実はいしかし、皮肉としか言いようがない。クライストはさらに愛国劇『ヘルマンの戦い』の一環として『ホムブルク公子』(„Prinz Friedrich von Homburg“)を創作していく一方、なおも警世の木鐸たらんと『ベルリント刊新聞』(„Die Berliner Abendblätter“)の刊行を企てていく。『ホムブルク公子』においては、効果は別にしてあの死という壮絶な行為を経ないで永遠なる自我が獲得されるという円熟した世界を、クライストは描き出すことができたが、効果を問う『ベルリント刊新聞』については、そうはいかなかった。幸運の女神も微笑することなく、またたく間に廃刊に追い込まれ、クライストは経済的苦境を迎えることになってしまった。生活のため止むなく求めた文官の職はおろか、軍籍復帰も受け容れられず、彼はいわば乞食同様になってしまった。さらにそこに拍車をかけたのが、信頼していた姉ウルリーケの冷たい態度と、時の国王があゝの忌わしいナポレオンと同盟を結んだことであつたと言えよう。一八一一年、クライストは友人のマリーに宛てて、強い愛国の気持にもかかわらず現実世界がすべて自分を裏切つていく悲しみを伝えている。「社会の単なる無用の一員、見向きもされない虫けら同様に扱われたことが、私にはひどいショックでした。これで、私の未来の希望が全く奪われてしまっただけでなく、過去まで毒殺されてしまいました

……もう何の用もありません。王に対する忠誠、献身、堅忍、その他あらゆる市民としての美德のせいで、王自身によって裁かれ、絞首刑にされる時が目前に迫ってきました。⁽¹⁷⁾」

現実世界での永遠なる自我の出現を夢みながら、孤軍奮闘してきたクライストは、その世界観ゆえに今まさに世界からかけ離れ、孤独な存在となってしまう。最後の作品となった『ホムブルク公子』において、永遠なる自我がみごとに描き出されたものの、現実生きるクライストには、事は同じように運ばなかった。ホムブルクはさしずめそうしたクライストの夢想花とでも言えようか。一八一一年十一月二十二日、クライストは自ら現実世界に永遠なる自我を求めて、文字通り「最後の友と一緒に、勇者として美しく死」ぬことになる。その際、友人のマリー、姉のウルリーケ、友人のゾフィーに宛てた手紙には次のように書かれていた。「私の魂は……死へと熱しきりました。⁽¹⁸⁾」私は世界に満ちたりた朗らかな気持でいます。⁽¹⁹⁾「天にある広野とそこを照らす太陽を夢んでいます。その光り輝く中を両肩に長い翼を生やし、さまよい回わるでしょう。⁽²⁰⁾」この言葉が永遠なる自我を獲得したホムブルクの心境とあまりに似すぎているところが、一層悲劇的である。

さあ今こそ永遠よ、お前はすっかり私のものだ！

お前は目隠しされた私のまなこに差し込んでくる、

太陽の千倍の輝きとなってだ！

私の両肩には翼が生え、

静寂のエーテルの高みを通り、私の魂は羽ばたき飛んでいく。^(V. 1830-1834)

註

TEXT Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe, hrsg. von Helmut Sembdner, München 1965.

- (1) Werke II S. 761
- (2) Werke II S. 761
- (3) Werke II S. 771
- (4) ヴェーゼル地方(トイトブルクの森とエルベ河の間の地方)に住むゲルマン民族(ヒュルスケル)の領主アルミニウス(一般にはヘルマン)が、西暦九年ヴァールスの率いるローマ軍をトイトブルクの森で撃退し、ゲルマニアの独立の基盤を築いた戦争。
- (5) Werke II S. 782
- (6) „gebrechliche Welt“ 及び『ヤンナズ・マレーン』の二九五九行に見られるが、その他の作品では „gebrechliche Einrichtung der Welt“ (『マヤリネ・ローレン・ベーン』) „unerklärliche Einrichtung der Welt“ (『侯爵夫人』) などの言葉が用いられている。
- (7) Werke II S. 769
- (8) Werke II S. 797
- (9) Werke II S. 824
- (10) Hans Erich Nossack: Die schwache Position der Literatur, Frankfurt a.M. 1967, S. 88
- (11) Gerhard Fricke: Gefühl und Schicksal bei Heinrich von Kleist, Darmstadt 1972, S. 20
- (12) Werke II S. 819
- (13) Hans Mayer: Von Lessing bis Thomas Mann, 1959, S. 217
- (14) Benno von Wiese: Die deutsche Tragödie von Lessing bis Hebbel, Hamburg 1964, S. 340
- (15) Werke II S. 378f.
- (16) Werke II S. 355f.

- (17) Werke II S. 884
- (18) Werke II S. 885
- (19) Werke II S. 887
- (20) Werke II S. 886